

金子直吉大人命五十年祭詞

長田神社 宮司 津田信基

此の長田神社參集殿の真保良を祓清め装い、暫の程招奉り鎮坐奉る故金子直吉大人命の御靈の御前に、齋主長田神社宮司津田信基謹み敬いて白さく

隙行く駒のいと速み、大人命や日本男子の面目躍如、正に波瀾万丈の現世を退りて行く水の往きて帰らぬ長の旅路に出で立ち給ひてより、指折数ふれば速くも五十年の春秋の來経行きて、今はや神ながらの式の隨に御靈慰めの御祭仕奉るべき年とはなりぬ。

汝命の一代の大き歩みは嚮に出版されし『金子直吉遺芳集』なる書に語り盡され今更に拙き言葉もて言挙げすれば、その言の葉及ばぬ事とは知りながら、汝命と魂合へる人々或は師と仰ぐ人等集い侍らふものから、その御跡の大要を思い偲び奉り、且は身退りし後の今の現の世の状をも具に告げまつらんとす。

阿われ大人命や、慶應二年六月十三日南国土佐の国は、名野川村の由緒ある家に生れ出で給ひぬ。世は明治維新を迎え、文明開化を唱えしも近代国家建設の道は未だ遠く厳しき最中に青少年期を過し給ひしが、家運傾く中にも貧困に堪えつ自ら精励苦学、若干二十一才にして神戸に移り来て鈴木商店に入り給ひぬ。これ汝命の一代を定めし時というべく、汝命が才智と努力と信念を貫き、鈴木商店の隆榮は言ふも更なり、その数六十にも及ぶ会社工場を創設し、天馬虚空を往くが如く日本経済界に君臨し給ふとは、誰も予想し得ぬことにてありけり。汝命の「資源なき日本の發展は工業化の外なし」との強き信念は生れながらの明察力と迅速なる決断と相俟つて、その業々進みに進み、

やがて三井・三菱に伊列らぶ發展を成し遂げ給ひぬ。
「鈴木商店の実力者として幾多の困難を克服し、神戸に一大総合商社を育てあげ、貿易・海運・重化学工業界に數多の輝かしい業績を遺し、今日の港都繁栄はその功績によるところ顯著なり」。これ神戸開港百年祭に当り、原口市長の顕彰の言葉なれど、大人命は唯に神戸の功労者のみならず「近代日本經濟創建功勞者十傑」にその名も高く称えられしは、いとめでたき事になんある。

常日頃、身は清貧に甘んじ私利私欲無く、一にも二にも國のためにと勤しみ給ひしかば人望から挙り、その気高き風格と一徹の清けき御心は残し給える数多の水茎の跡にも偲ばるものぞかし。初霞四百余州をひとめ哉、花作る花見る時はなかりけり」その壮大な御心と東奔西走の御姿を想いて余りありといふべし。

然る程に榮枯盛衰は世の習い、大正の末つ頃より昭和にかけて世界的經濟不況の嵐の中に、母船とも云ふべき鈴木商店も遂にその波風に揺れ動く状態となりぬ。大人命や、天下取る狸おやじの昼寝もあらばこそ、ひらすらその再興に身も棚知らに励給ひぬ。幸なるかな大人命、

沢山の事業を残すのみならず、常に人を見る眼正しく経済人の誇を誇とする後継者を育て導き給ひし甲斐も著く、関係の人等心一つに力を合せ、その再建に盡したるは美しくも尊き姿なりけり。

大戦遂に我に利あらず國土は焼土と化し、日本は更に苦難の道を進むこととなりしが、汝命やこの終戦を知り給はず、昭和十九年二月二十六日阿波礼七十九才をこの世の限りと神去りました。

「花散りて後の青葉ぞ快き」、「うき世から極楽に続くかすみ哉」実げに悲しくも雄々し一代なりけり。戦後既に四十有八年、乏しきに耐え、苦しきを偲び、万世の為太平を開かんとの大詔畏み奉りて、國民力を協せ日本再建に励みし甲斐も著く、將亦東西冷戦の世界情勢の狭間

も幸いして、次々と国力を加え今や世界GNP一・二を競う經濟大国となり、殊にも汝命の世には未だ遠く及ばざりし日本のハイテク技術は正に世界一を誇る迄に立栄ゆる状を、天翔り国翔りして、我が信念に間違いなし、あな嬉しあな天晴れと見看し坐せ。

楠の大木新緑鮮かに風薰る今日しも、辰巳会の会長鈴木治雄い始め御縁深き人等遠近より所も狭らに參集ひ、今日の御饗と御食御酒をはじめありし日好ませ給ひし種々の味物に白菊も清らに供奉り、八や十玉串取々に報謝拝奉る状を心平穩に聞召し諾ひ給ひて、今も将来も此の金子の家の守護神と永遠に鎮り坐して、家族親族を幸く真幸く守給ひ、家門高く広く子孫の八十統五十檣八桑枝の如く立栄えしめ給ひ、又汝命の遣し給へる会社工場の弥榮は更なり、我が國經濟界と世界的責務愈々重きを加える唯ならぬ今の大御國の行手を幸く真幸く守り導き給へと、謹み敬ひて白す。

平成五年五月二十日

会長挨拶

辰巳会 会長 鈴木治雄

本日の大会を開催するにあたっては昨年の大会終了後の幹事会におきまして直ちに日取りを決め大会内容について幹事一同協議致しましたところ、一幹事から『来年（平成五年）は金子直吉翁が亡くなられて五十年目に当たります。』という発言があり、幹事一同この『金子翁を偲ぶ会』と銘打つて大会を開催しようと言ふことに決め、直に準備に入りました。場所を決めるに当たっては、過去二十年祭、三十年

祭と生田神社にて行いましたが、近年生田神社は都心にあって神社らしい落ち着いた風情が無くなつており、別の落ち着いた風情の神社にて開催できないか?との意見が出ました。そこで長田神社にお願いする事になりました。というのは私が中学生時代に毎日この前を通つて通学していた事もありまして、長田神社には特別の愛着もあり、また宮司の津田氏もよく存じ上げておりましたので、祭主をお願い致しましたところ快くお引き受け頂きまして、ここに金子翁の五十年祭を執り行う事となりました。

本日ここにお集まり下さいました皆様は、直接、または間接に金子翁の薰陶を受けられた方々、又金子翁の色々な事を学ばれた方々でございますので金子翁の事は皆様よく御理解されておられる事と存じ上ります。御遺族の方々には、御招請申し上げましたところ快く御出席頂きまして、今日このように盛大に行われる事と相成りました。

金子翁の残された色々な事業は、大正・昭和の年代にくまなく動き始めたのですが戦火により殆どの会社が壊滅的打撃を受けましたが、それぞれの会社の経営者が金子翁の教訓を中心とされ奮闘努力された結果の発展が、現在の日本の工業の興隆の中心となつていると申し上げても決して過言ではないと存じます。

その金子翁が亡くなられて丁度五十年目の年でございます。本日は金子翁のご遺徳を偲びまして、それぞれの皆様方の心からなる翁に対する敬愛の念を持ちまして、御一緒に祭りをさせて頂きたいと存じます。